



Title	日本における精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築：インタビュー・ナラティブの談話分析
Author(s)	周, 氷竹
Citation	間谷論集. 2024, 18, p. 61-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本における精神障害ピアサポーターの アイデンティティ構築

——インタビュー・ナラティブの談話分析——

周 氷竹

〈キーワード〉 ピアサポーター アイデンティティ 談話分析 障害(者) 文化

1. はじめに

ピアサポート (peer support) とは、字義通りに捉えると「仲間によるサポート」であり、同じ苦しみや生きづらさを抱える当事者が互いに支える活動とされている (石原 2013:23)。

実際の現場におけるピアサポートは、大きく2つの形態に分けられる。1つは、当事者間における無償かつ自発的な相互支援を行う「相互支援グループ・セルフヘルプグループ」である。もう1つは、当事者の提案した支援サービスが有償・無償に関係なく提供される「当事者サービス提供者・ピア提供サービス」である (岩崎 2018:6)。本稿では、上記の分類における後者「当事者サービス提供者・ピア提供サービス」としてのピアサポートをする人、いわゆるピアサポーターの語りに焦点を当てる。

日常生活における出来事の共有とは異なり、障害に伴う苦痛や葛藤は、同様の経験がない人とは共有しづらいといえる。例えば制度的な医療場面では、当事者と医師は不均衡で対等と言えない関係にあり、双方間の会話も薬の処方など治療法を中心に行われていて、障害によってもたらされる感覚や生活上の困難を語ることが難しい。家族や友人同士といった関係であっても、潜在的なステレオタイプを持たれ、誤解される場合も多い。そのため支援の現場では、「障害のある人生に直面し、同じ立場や課題を経験してきたことを活かして仲間として支えるこ

と」ができるピアサポーターは重要な役割を果たす（岩崎他 2017）。

近年、日本の精神医療をめぐる体制においては、精神科病院の長期入院から地域移行支援への転換、すなわち脱施設化が進められてきた（田中 2001、立岩 2015）。このような状況下で、ピアサポートの役割が注目されつつある。2010 年に、精神障害当事者の地域移行・地域定着支援事業において、「ピアサポートの活用」が明記され、ピアサポーターの費用が計上されたことにより、日本全国各地でピアサポーターの養成が行われている。これを契機に、ピアサポーターとして従事する当事者が増えている（相川 2013）。さらに 2021 年、障害福祉サービス等報酬改定¹では「ピアサポート体制加算」、「ピアサポート実施加算」が創設され、サービス提供者としてピアサポーターが活動する機会は一層広がることが予測される。

このような状況下で、日本におけるピアサポートやピアサポーターに関する研究は未だ十分とは言えない。先行研究としては、ピアサポーターの効果を検証するものや、ピア活動の意味を通時的に調査するものが多く見られる（2-1 で後述）。日本の精神保健福祉領域で新しい役割を担う、社会的カテゴリーとしてのピアサポーター本人には、当事者と支援者を融合した、複雑な立場が内在化されている。この立場性を解明するには、実際の談話データを対象に、ピアサポーターのアイデンティティの共時的な構築プロセスを分析し、検討する必要に迫られている。

そこで本稿では、支援現場で働く 2 名のピアサポーターの語りを取り上げ、分析を行う。それを通じて、ピアサポーター本人による自身の立場の捉え方を明らかにすることが、本稿の目的である。そのために、ピアサポーターの語りを通して、2 名のピアサポーターのアイデンティティの構築を方向づけ、規定する障害に関する社会的規範（social norm、すなわち、どうすべきか）をも批判的に考察する。

2. 先行研究と本研究の位置付け

2-1. 日本におけるピアサポーターに関する研究

栗原（2019）は、近年の精神障害当事者のピアサポートに関する研究を内容的

に4つに大別している。第1に「ピアサポーターの精神障害者に対する働きかけと影響に関する研究」(松本他(2013)、大崎他(2015)、小砂他(2017)を参照)、第2に「ピアサポーターの看護教育への参加と影響に関する研究」(矢野他(2014)、矢野他(2017)、田中他(2017)参照)、第3に「ピアサポート活動による自身のリカバリーへの影響に関する研究」(千葉他(2011)、藤本他(2013)、武政他(2014)、濱田(2015)、Fujimoto et al(2016)を参照)、第4に「ピアサポーターになるまでの過程」に関する研究(木村(2016)を参照)がある。

前者2つの研究はピアサポーターによる活動の効果を検証したもので、後者2つの研究は時系列に沿い、ピアサポーター本人に対するピア活動の意義を考察したものである。「ピアサポートの活用」といった表現が条例に盛り込まれたのは2010年と、わずか10余年前のことで、ピアサポーターは精神保健福祉領域ではまだ新しい役割(role)といえる。この新しくて、一当事者として支援するという複雑な役割については、先行研究でなされてきた効果や意義についての通時的な考察だけでは不十分であると考えられる。行實(2016)によると、ピアの捉え方によって友達感覚でいるピアサポートから、就労形態としてのピアスタッフまで、色々なピアサポートの「感覚」、「質」と「立場」が混在している。そこで、ピアサポーターについてより深い理解を得るため、当事者の語りを分析し、彼・彼女らはいかにピアサポーターという立場を捉えているかを共時的に精査する必要があると考えられる。

2-2. ナラティブ、アイデンティティと社会的規範

秦(2013:249)は、語り(ナラティブ)を「語りの世界において今・この場の影響(社会文化的な影響や語り手と聞き手の相互行為の影響)を受けながら、それによって語られる世界を評価し再構築していく一連のプロセス」と定義している。また浅野(2001:26)は、「他者に向けて自己を語るという行為は、まさに他者との相互行為の中で「私」が何者かとして形成されていく過程にほかならない」と主張している。本稿では、ナラティブは会話参与者間(ピアサポーターらと筆者)の相互行為を通じて、自己をどう位置付けるか(アイデンティティ)を示しながら、語られる世界を再構築する社会実践と捉える。

アイデンティティとナラティブが密接に関連していることは、談話分析に関する研究の前提となっている (Giddens (1991)、Georgakopoulou (2006)、De Fina & Georgakopoulou (2012) などを参照)。Goffman (1974) は、アイデンティティを提示し、演じ、管理する対象として捉え、相互行為を通して存在するものであり、状況に埋め込まれるものであるとしている。Georgakopoulou (2006) は Goffman のアイデンティティに対する捉え方を基に、アイデンティティを「大きな」アイデンティティ (相互行為の場を超え、外因的で「持ち運び可能な」(transportable) アイデンティティ) と、相互行為上の役割といった「小さな」アイデンティティ (語られる特定の場に固有の、内発的なアイデンティティ) に分けている。「大きな」アイデンティティを明らかにするためには、語りに内在された「小さな」アイデンティティを分析することが最善の方策であると論じている。本稿でも、語りにおけるピアサポーターの「小さな」アイデンティティ (位置づけ) を分析することで、大きなアイデンティティを考察する。本稿はポジショニング (positioning、位置付け) という概念を用い、ピアサポーターのアイデンティティ構築を考察する。要するに、「私とは何者か」を分析することで、ピアサポーターの複合的な立場を精査する。

Kiesling (2006) はアイデンティティが、特定の社会的行為者がどのように行動すべきか、話すべきかといった社会的規範や期待を背景とした、日常的なパフォーマンスの中で構築されていると述べている。すなわち、人々のアイデンティティを方向づけ、規定するのは社会的規範だといえる。そこで本稿も、アイデンティティ構築の底流となる社会的規範を考察に入れる。

2-3. 本研究の位置付けとリサーチ・クエスチョン (RQ)

ピアサポーターという新しく複雑な役割 (role) を明らかにするために、本稿は相互行為の中でなされたナラティブを分析対象とし、言語的な特徴に着目する。それを分析することで、ピアサポーターの流動的なアイデンティティと、ピアサポーターのアイデンティティを規定する社会的規範を考察する。

そこで、本稿は以下の3つのリサーチ・クエスチョン (以下、RQ と略) を設定する。

RQ ① 語りの中で、いかなる言語的な特徴が見られるか。

RQ ② 語りを通して、いかなるアイデンティティが構築されているか。

RQ ③ いかなる障害に関する社会的規範が映し出されているか。

以上3つのRQに沿って、ピアサポーターの立場を捉える手がかりを示し、障害に関する規範の輪郭を炙り出す。

3. 方法論

3-1. 分析で使われる概念：声（voice）の引用、ポジショニング（positioning）

バフチン（1979:99-114）は、文学作品の中にあらわれる引用は多声性という性質を持つと指摘している。Tannen（2007:105）は多声性の概念を一般的な会話に援用し、会話の中で使用される直接引用も過去に発した言葉の再現ではなく、語り手による多声性を帯びた「創造された対話（constructed dialogue）」であると指摘している。日本語の文脈では、「創造された対話」と似たような概念として、「想定引用」が挙げられる。想定引用は、他者の言葉や思考を報告するためではなく、皮肉や共感など、現話者の表現態度を伝えるストラテジーとして用いられており、様々な「声」を操作して重層的なコミュニケーションを産出している（伊原 2007:27）。こういった再現された「声」は、特定の感情やイデオロギーを背景とした様々な人の視点を具現する（松木 2008）。

ポジショニング（positioning）は社会構成主義を背景とした、位置づけを示す概念であり、会話参与者によって協働で創出された会話の中で、参与者としての自己の立ち位置が客観的にも（間）主観的にも首尾一貫した形で会話の場に置かれるという、談話プロセスの概念の1つである（Davies and Harré 1990）。Bamberg（1997）はポジショニング分析を3つのレベルに分けている。レベル1として語りの世界におけるポジショニング、レベル2として他者との相互行為におけるポジショニング、レベル3としてその場その時の文脈を離れても成立する、社会文化的なポジショニングである。本稿は語りをレベル毎に分けて、構造的な特徴を見るものではなく、Positioning という概念を用いて、ナラティブにおける語り手の立ち位置を提示するためのものであるため、レベル分けはしないことにする。

「4. データ分析」では、「声 (voice)」と「ポジショニング (positioning)」という2つの概念を援用し、分析を行う。

3-2. データの詳細

本研究で用いるデータは2022年11月に行われた2回のインタビューの断片である。筆者は当事者団体Yに依頼文を送り、団体のメンバーに回覧してもらい、協力が得られたメンバーIMとKEに対して、インタビューを行った。インタビュアー（筆者、ZB）とインタビューイ（IM、KE）の基礎情報は以下の通りである。

表1 インタビュー協力者の基本情報

協力者	世代	職業	性別	エスニシティ	精神障害
ZB（筆者、 インタビュアー）	20代	大学院生	女性	中国	非当事者
IM （インタビューイ）	50代	ピアサポーター、 NPO 法人の代表	女性	日本	うつ病、 双極性障害 の当事者
KE （インタビューイ）	50代	ピアサポーター	男性	日本	統合失調症 の当事者

できる限り自然な談話データを収集するため、半構造化インタビューを行った。インタビューにおいて、インタビュアーは予め用意した質問（ピアサポーターに関する経験、当事者団体での活動など）を適宜投げかけ、インタビューイに語ってもらった。

IM とのインタビュー（合計2回）の長さはそれぞれ1時間33分（1回目）と、1時間32分（2回目）である。本稿のデータは、2回目のインタビューで出現したものである。KE とのインタビュー（合計1回）は1時間20分である。なお、対面での録画はインタビューイの負担が大きいと判断し、すべてのインタビューは録音のみとした。

また、倫理的な配慮を行った上で、調査に協力してもらうことについてインタビューイの同意を得た。同時に、その調査の内容が精神障害に関するライフ・ス

トリーについて聴きたい旨を明記したインフォームド・コンセントをとった。

4. 分析

以下インタビュー別に言語的な特徴に着目し、インタビューの位置付けとアイデンティティを分析する。すなわち、RQ ①と RQ ②に関して分析を行う。そして「5. 考察」では、RQ ①と RQ ②に関する分析を踏まえ、RQ ③についても考察を行う。

ここで本稿の書き起こしについて説明を補足する。まず、書き起こしに「声 (voice)」にあたる部分に下線を引いた。また、本文においてデータを引用する際は、例示したデータの行番号を括弧内に示した。例えば、1 行目の場合は「(1)」となり、1 行目から 3 行目にかけての場合は「(2-3)」となる。

4-1. IM の語り

まず、IM の語りを見ていこう。IM は就職や結婚、出産などを経験し、30 代の時にうつ病と診断され、その後双極性障害と診断された。頻繁な通院と薬が必要な生活を長年にわたって経験したが、減薬に取組み、より安定した生活を取り戻した。2019 年に自助グループに参加して活動を始め、2021 年に NPO 法人 R を立ち上げ、新たなスタートを切った。NPO 法人 R はピアカウンセリング、談話会や講演会などのメンタル事業を請け負っている。

例 1 は、IM と ZB が「当事者」と「支援をしている人」といった立場について話す場面である。

例 1 <支援している IM さんと当事者の IM さんは同じ人？>

(録音の 17:24-18:36)

1. ZB: 支援をしている IM さん [と当事者である IM さんは (.) 同じ人？
2. IM: [ん
3. 同じ人ではない [@@@ (..) ではない
4. ZB: [@@@@
5. IM: やっぱり行政側に言われていること

6. ZB: んん
7. IM: その 守らなきゃいけないこと
8. ZB: はい
9. IM: 行政で最低限
10. ZB: はい
11. IM: その部分は守らなきゃいけない
12. でも当事者の私は そんなの なくなってもよくない↑
13. ZB: hh
14. IM: (.) て思ってるところもある
15. ZB: ん ::
16. IM: どうかこう 逃げ道があるなら
17. ZB: はい
18. IM: ん なんか こう ごまかしてね 逃げ道があるなら なんか
19. 使えるサービス 使ってもいいんじゃない↑ って思ってる
20. 当事者の私もいる
21. ZB: はい
22. IM: だけど それはあくまでもプライベートの私であって
23. ZB: そう
24. IM: 仕事として その相談員として ピアサポーターとして
25. やるからには その部分っていうのは
26. ZB: ん
27. IM: やっぱり行政に最低限 言われてるルールは守って
28. それが社会人だからね 結局
29. ZB: 確かに
30. IM: だけど こっち側の言ってることもわかる
31. ZB: ん
32. IM: こういうふうなこと できませんかねっていう 声をあげる
33. ZB: ん
34. IM: 声をあげて それで行政側があ じゃあって認めてくれればラッキー

例1の冒頭(1)では、「当事者」(1)と「支援をしている」(1)ピアサポーターといった立場を同時に持つIMに対して、インタビュアーZBはこの2つの立場が矛盾するか否かを尋ねている。IMは「同じ人ではない」(3)と答え、当事者である立場と支援者である立場の差異を明確化している。5-11行目までで、IMは2回「守らなきゃいけない」(7, 11)と繰り返し、行政上のルールに従う支援者の立場を強調し、表出している。

続いての11-19行目で、IMは「そんなの なくなってもよくない↑」(12)、「なんか使えるサービス 使ってもいいんじゃない↑」(18-19)という声を用い、行政上の面倒な手続きに抵抗感を示し、利用できるサービスを利用するといった、サービス利用者としての当事者であるアイデンティティの構築を遂行している。その後、IMはこのアイデンティティを「あくまでも プライベート」(22)といった表現でまとめ、私的領域に帰結し、当事者であるアイデンティティを個人的なアイデンティティとして後景化している。

続いて23-27行目で、IMは再び行政上のルールに従う支援者としての立場を表出している。そして、IMは「それが社会人だからね 結局」(28)といった評価で語りを収束する。

ここで「だからね」に着目し、分析したい。加藤(1995)は「だから」の用法に潜む主体的側面を強調し、「だから」は必ずしも原因-結果ではなく、むしろ前提-帰結の関係に基づいていると述べている。ここでIMは「社会人」という表現を用い、働くことの規範性に帰結し、支援者アイデンティティを前景化させている。

続いて29-33行目で、IMは再び、「こっち側」(30)という発話者に近い心理的距離を指し示す指示詞²を用い、「障害の当事者」といったカテゴリーに親近感を示した。当事者とある程度の共通基盤 (common ground)³を分有する経験者として、当事者の事情について行政側と相談する際に、「こういうふうなことでできませんかね」(32)と当事者のために声を上げられる。IMは精神障害の当事者だった過去を持ち、症状が寛解した今はピアサポーターとして働いている。IMは行政と当事者の中で往来する代弁者、仲介者としての自己を構築しており、当

事者と行政をつなぐ架け橋になりたい意思を表出している。

4-2. KE の語り

難しい状況にある当事者をサポートするには、行政による福利厚生は非常に重要である。IM の語りから、行政と当事者をつなぐ当事者の存在が確認できた。

ここからは、もう一人のピアサポーターである KE の語りを見ていこう。KE は中学校時代に統合失調症を発症し、症状が寛解した後に就職を試みたが、できなかったという。今はパートとしてピアサポーターをしている。例2は、KE がピアサポーターとしての自身の抱負を話す場面である。

例2 <僕は違うゴールの道もあるんじゃないかっていう風に思っていて>
(録音の 26:10-27:20)

1. KE: 就職はすごく立派なことなんだけど
2. ZB: ん
3. KE: その それだけがゴール 人生のゴールじゃないって 今は思っていて
4. 僕は違う ゴール の道もあるんじゃないかっていうふうに思っていて
5. それはもう僕の後輩っていうか
6. ん その人のため その人たちのために ピアとしてね
7. 何ができるかってことを今考えてる
8. ZB: なるほど KE さんが が なんか違うゴールがあって
9. その違うゴールって何を指してるんですか
10. KE: ん : あの : 例えば 今 SNS とかあるじゃないですかんで
11. SNS で あの : そういうその自分の経歴とか
12. ZB: ん
13. KE: 今の自分の思いとかを ん 発信していく もちろん
14. その自分は精神障害者であること 公表して
15. ZB: んん
16. KE: 発信していくとか
17. ZB: ん

18. KE: あと 僕音楽が好きであの 弾き語りとかをするので あの
19. もうちょっと練習して うまくなったら その 例えば
20. ライブハウスとかに行って で
21. 僕は精神障害者ですってことを公表して 演奏して そのあと
22. みんなと食事したりとかして そうしたら その
23. 健常者の人が あ (.) なんだ : 精神障害者って言うけど
24. そんなに俺たちと変わらないんじゃないかっていう
25. ようなことを思ってくれたりとか あの
26. そういう差別や偏見をなくしていく運動 もん
27. これからしたいなとは思っていて

KE はまず就職といった目標を「立派」(1) と評価するが、自分の人生の「ゴール」(3) はそこにないと述べている。続いて KE は、「僕は違うゴールの道もあるんじゃないか」(4)、「僕の後輩というか その人のため その人たちのために ピアとしてね 何ができるか」(5-6) と内在化された声 (inner voice) を引用している。KE は「後輩」(5) という言葉で自分より若い当事者という対象群を指し示している。そして、KE は「ピアサポーター」の略語である「ピア」(6) を使い、自分のピアサポーターとしての立場を明示している。また、ここで KE は「その人のため」と言った途端、「その人たちのため」と修復し、より抽象度を上げている。この言い換えを通じて、特定の個人のみならず、若い人たちという広い対象群が指し示されている。この一連の語りを通して、KE は若い人たちのために新しい道を切り拓こうとするパイオニアであり、ピアサポーターである自分を構築している。

続いて、さらに「違うゴール」(9) について ZB が具体的に尋ね、KE は、SNS を通じて自分が精神障害者であることを公表する例を挙げている (10-16)。SNS での自己開示を通じて、精神障害当事者に対する世間のマイナスな印象を刷新することを志向する、自己を構築している。

その後、KE は音楽のライブで精神障害者であることを開示し、聴衆らと食事をし、「健常者」から理解を得たとスモール・ストーリー⁴ (18-23) を描き始め

る。

このスモール・ストーリーの中でKEは弾き語りをし、精神障害者と公表する「僕」(21)と、その弾き語りを聴き理解を示す「健常者の人」(23)という構図を作り出す。ここでも、KEは曖昧な人称指示詞(例えば「みんな」、「みなさん」)を使わず、直接「健常者の人」(23)と切り出している。これを通じて、承認を得る相手、偏見をなくさせたい所在を明確化している。このストーリーの中で、KEは自分という人物と、理解を示した「健常者の人」との対話を構築している(constructed dialogue)。物語世界における自分は、「僕は精神障害者です」(21)と公の場で自己開示をする。演奏の後、KEと聴衆らは会食をする。そのKEの様子を見て、聴衆らは「俺たちと変わらないじゃないか」(24)と感得する。この物語世界でKEは、「健常者を前に自己開示し、健常者らの承認を得た」障害者としての自己を構築するとともに、障害や障害者に関して知識や理解のない健常者像も作り出しているのではないかと考えられる。Tannen(2007)は構築された対話について、話された言葉を文字通りに繰り返すのではなく、話者の固有な視点を反映し、話者の立場から構成されたものであると述べている。ここでもKEの作った対話には、KEの視点から見れば日常生活で「健常者」と呼ばれる人たちは精神障害のある人たちとあまり接点がないこと、また、精神障害者に対する社会的イメージがマイナスであることが映し出されているのではないかと考えられる。

このスモール・ストーリーを描くことでKEは、健常者と障害のある人の接点が不足しており、精神障害のある人の情報が健常者に適切に伝わっていないとKEが考える状況において、障害のある人と健常者と呼ばれる人をつなぎ、精神障害に対する理解を促進したい人というアイデンティティを構築していた。例2において、KEは障害のある人の代表として、障害のある人となない人をつなごうと考え、若い世代のために新しい道を開拓するパイオニアとして自己を位置付けていることがわかった。

5. 考察

本章では例1と例2の分析結果をもとに、3つのRQについて考察する。

まず、RQ ①について見ていく。例1と例2の語りを特徴づけるのは、語り手IM、KEが構築した多彩な「声」だと分析できる。例1のIMの語りでは、IMは12行目の「そんなの なくなってもよくない↑」、18-19行目の「なんか使える サービス 使ってもいいんじゃない↑」、31行目の「こういうふうなこと できませんかね」といった「声」の引用から、行政上の面倒な手続きに抵抗感を示す当事者である自己と、態度を和らげ行政とつながる仲介者である自己が鮮明に描写された。また例2のKEの語りでは、「健常者に向けて演奏をし、健常者と一緒に食事をしてから、健常者の承認を得た」といったスモール・ストーリーが挿入されている。このストーリーで出現した「声」は例1のモノローグ的な「声」ではなく、「僕は障害者です」というKEと、「俺たちと変わらないじゃないか」という健常者によるダイアログなのである。このようなダイアログを構築することにより、KEの潜在的な意識、すなわち「承認してもらふ障害者と、承認をする健常者」といった不均衡な力関係がより明瞭に映し出されているのではないかと考えられる。

次に、RQ ②について考察を行う。例1で、IMは最初に「あくまでもプライベート」と当事者としての自己を後景化させ、また、「社会人だからね 結局」といった評価を行い、行政に従う支援者として自己を前景化させている。その後IMは「こっち」という指示詞を用いて、当事者というカテゴリーとの距離を調節し、当事者の苦痛がわかり行政とも話しができる「仲介者」といったアイデンティティを創発的に作り上げている。例2では、KEは語りを通して、若い世代のために新しい道を拓きたいパイオニア、障害のある人となない人（いわゆる「健常者」）をつなぐ架け橋というアイデンティティを構築している。2人の語りから共通して見出されるのは、2人ともピアサポーターという役割（role）のある種、中間にあり、媒体となるようなアイデンティティとして位置付けていることである。ピアサポーターとして、行政と当事者、障害のある人となない人を繋いでいる。

最後に、RQ ①とRQ ②についての分析を踏まえ、RQ ③を考察する。例1と例2の分析を通じて見られるのは、「就労」という規範なのではないかと分析できる。早野（2016）は精神障害当事者間で、社会復帰の程度に応じて序列化され

ると述べ、就労を指標とした社会的な役割遂行能力を持っている当事者の方が評価されるという。2-2 で記述したように、社会的規範が語り手のアイデンティティ構築を方向づけ、規定する。例1では、IMは自己を寛解した障害者と位置付け、有能な労働者である自己像を作り出している。このような自己を評価される対象としている。一方、例2でKEは、語りの冒頭における「就職はすごく立派なことだけど」という文言で、マスター・ナラティブ (master narrative)⁵としての就職に対し、否定はせずとも肯定もしていない、自分の世界とは別のものという距離感を述べている。KEは逆接である「けど」を用い、マスター・ナラティブに対抗する、「自分が新しい道を拓く」というナラティブを提示し始めたのである。すなわち、対抗するナラティブを明示的ではなく、暗示的に表している。障害当事者として必ずしも希望しない就労をせざるを得ないという現状の中で、KEはパイオニアと自己を位置付け、より幅広い選択が可能となる、新しい道を開拓したいのである。これらのことから、精神障害当事者間においては、就労といった規範の根強さが窺える。

6. 結語

本稿は2名のピアサポーターIM、KEとのインタビュー・ナラティブを分析対象とし、話者の位置付けを示すポジショニングと「声」という概念を用い、話者のアイデンティティ構築のプロセスと映し出された社会的規範を分析した。IMとKEの引用した多彩で豊かな「声」(モノローグとダイアローグ)から、彼らが当事者と行政、当事者と非当事者をつなぐ中間にあり、仲介者としてのアイデンティティを構築していることが読み取れた。また両者の語りの底流には、「働かないといけない」という考え、すなわち、就労という規範が潜んでいることも確認できた。

先行研究では、ピアサポーターの立場の曖昧性や、利用者との境界の問題がすでに指摘されてきた Repper and Carter (2011)・岩崎 (2018)。本稿は言語学のアプローチである談話分析を援用し、現場で活動しているピアサポーターの語りを分析することで、彼らの曖昧性を持つ立場について考察した。限られたデータによるものであるため、限界はあるが、本稿がピアサポーターという日本における

新しい社会的カテゴリーの役割について、示唆を与えていることを願う。

トランスクリプト記号一覧

(n.m) 1 秒以上の沈黙	: 直前の音の引き延ばし	(.) 小休止
@ 笑い（個数は長さ）	.h 笑いに伴う発話	… 言い淀み
↑ 直前の音の上昇	[オーバーラップ開始	= ラッチング

注

- 1 「厚生労働省 ピアサポートの専門性の評価」<https://www.mhlw.go.jp/content/000998236.pdf>（最終アクセス：2023 年 11 月 13 日）
- 2 阪田（1971）は空間的・時間的・心理的な距離といった基準で、日本語における指示詞を分類し、コは空間的・時間的・心理的に話し手に近いもの、ソは少し離れたもの、アは話し手に遠いものであると主張している。
- 3 Clark（1996）によれば、共通基盤（common ground）とは、コミュニケーションを通じた相互理解を達成するために必要な相手と自分の背景知識の基盤である。
- 4 イエルゴコボロ（2013:24）はスモール・ストーリーを、現在進行中の出来事、未来や仮定の出来事、語りを据え置くこと、また語るのを否定することなど、「会話の文脈において頻度が高く、目立つナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語」とであると定義している。
- 5 桜井（2012:103）は、マスター・ナラティブを、「全体社会の支配的文化」として語られているナラティブであると定義している。

参考文献

- アーヴィング・ゴッフマン (1974) 石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房
- 相川章子 (2013)『精神障がいピアサポーター』中央法規出版
- 浅野智彦 (2001)『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』勁草書房
- イエルガコポロ・アレクサンドラ (2013)「ナラティブ分析」佐藤彰・秦かおり・岡本多香子訳、佐藤彰・秦かおり (編)『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房 pp.1-42
- 石原孝二 (2013)「当事者研究とは何か」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院 pp.11-72
- 伊原紀子 (2017)「コミュニケーション・ストラテジーとしての想定引用」『社会言語科学』19 巻 2 号 pp.27-42
- 岩崎香・秋山剛・山口創生・宮本有紀・藤井千代・後藤時子 (2017)「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修の構築」『日本精神科病院協会雑誌』36 巻 10 号 pp.20-25
- 岩崎香 (2018)「ピアサポート、ピアサポーターとは何か？」『社会福祉法人豊芯会 ピアサポートの活用を促進するための事業者向けガイドライン』pp.5-7 <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000521819.pdf> (最終アクセス：2024 年 1 月 13 日)
- 大崎瑞恵・大西アリナ・大井美紀 (2015)「地域で生活する精神障害者のリカバリーに関する要因分析」『精神科看護』42 (1) pp.57-66
- 加藤薫 (1995)「原因・理由を受けない『だから』—『だから』の主體的側面の突出—」『早稲田日本語研究』(3) pp.14-31
- 木村貴大 (2016)「精神障害者がピアサポーターになる過程 —A 氏のライフストーリーからみいだされるもの—」『北里学園大学大学院論集』(7) pp.1-17
- 栗原はるか (2019)「精神障害をもつピアサポーターについての研究動向と課題 (文献検討)」『聖泉看護学研究』Vol.8 pp.29-36
- 小砂哲太郎・水野健・野村千佳 (2017)「精神科作業療法へのピアサポートの導入が精神科病院入院患者に与える影響—地域生活に対するイメージや行動の変化に着目して—」『東京作業療法』(5) pp.51-58
- 阪田雪子 (1971)「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21 pp.125-138
- 桜井厚 (2012)『ライフストーリー論』弘文堂
- 武政奈保子・村上満子・野田義和 (2014)「ピアサポーターのスピリチュアルペインの自己治癒力—地域活動を行う当事者のピアサポート活動に関するインタビュー調査から—」『日本精神科看護学会誌』57 (2) pp.83-87
- 立岩真也 (2015)『精神病院体制の終わり—認知症の時代に』青土社

- 田中英樹 (2001)『精神障害者の地域生活支援——統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーク』中央法規出版
- 田中千絵・矢野優・杉浦浩子 (2017)「当事者参加型授業の精神看護学実習における学びの活用状況」『日本看護学会論文集』(47) pp.151-154
- 千葉理恵・宮本有紀・川上憲人 (2011)「地域で生活する精神疾患をもつ人のピアサポート経験の有無によるリカバリーの比較」『精神科看護』38 (2) pp.48-54
- 秦かおり (2013)「「何となく合意」の舞台裏：在英日本人女性のインタビュー・ナラティブにみる規範意識の表出と交渉のストラテジー」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』pp.247-72 ひつじ書房
- 濱田由紀 (2015)「精神障害をもつ人のリカバリーにおけるピアサポートの意味」『日本看護科学会誌』(35) pp.215-224
- 早野禎二 (2016)「精神障害と社会 —歴史社会学の視点から」『東海学園大学紀要』第23号 pp.29-53.
- 藤本裕二・藤野裕子・楠葉洋子 (2013)「地域で暮らす精神障害者のリカバリーに影響を及ぼす要因」『日本社会精神医学会雑誌』22 (1) pp.20-31
- 松木啓子 (2008)「ナラティブ考 —コミュニケーション行為としての語りをめぐって」唐須教光編『開放系言語学への招待 —文化・認知・コミュニケーション』慶応義塾大学出版会 pp.103-119
- 松本真由美・上野武治 (2013)「精神障害者地域移行支援事業におけるピアサポートの効果 仲間の支援と熟達の支援の意義について」『精神障害とリハビリテーション』17 (1) pp.60-67
- ミハイル・バフチン (1979) 伊藤冬一郎訳『小説の言葉 ミハイル・バフチン著作集5』新時代社
- 矢野優・田中千絵・杉浦浩子 (2014)「精神障害者の学内演習参画が看護学生に及ぼす影響」『日本精神科看護学会誌』57 (2) pp.83-87
- 矢野優・田中千絵・杉浦浩子 (2017)「精神障害ピアサポーターが当事者参加型授業に参加する意義」『日本看護学会論文集』(47) pp.15-18
- 行實志都子 (2016)「精神障害者ピアサポートを使った地域作りの一考察」『神奈川県立保健福祉大学誌』13 (1) pp.45-52
- Bamberg, M., Positioning between structure and performance, *Journal of Narrative and Life History* (7) (1997) pp.335-342
- Bamberg, M., We are young, responsible and male”: Form and function of “slut-bashing” in the identity constructions in 15-year-old males, *Human Development* (47) (2004) pp.331-353
- Clark, H., *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press (1996)
- Davies, B., Harré, R., Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of*

- Social Behavior (20) (1990) pp.43-63
- De Fina, A., Georgakopoulou, A., Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives. London: Cambridge University Press (2012)
- Fujimoto, Y., Fujino, Y., Matsuura, E., et al. Correlation Between the Recovery Level and Background Factors of Schizophrenics in the Community, 日本健康医学会雑誌, 25 (4)(2016), pp.335-339
- Georgakopoulou, A., Thinking big with small stories in narrative and identity analysis. Narrative Inquiry 16 (1) (2006) pp.122-130
- Giddens, A., Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age, Polity Press (1991)
- Kiesling, F., Hegemonic identity-making in narrative. Discourse and Identity, Cambridge University Press (2006)
- Repper, J., Carter, T., A review of the literature on peer support in mental health services. J Ment Health 20 (4) (2011) pp.392-411 doi: 10.3109/09638237.2011.583947.
- Tannen, D., Talking Voices: Dialogue and Imagery In Conversational Discourse. (Studies in Interactional Sociolinguistics, Cambridge University Press (2007)

謝辞・付記など

本稿は科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 (JPMJFS2125) の助成を受けたものである。

シュウ ヒョウチク (大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻博士後期課程)

Identity Construction of Peer Supporters in Japan Discourse Analysis of Interview Narratives

ZHOU Bingzhu

This paper focuses on the analysis of interview narratives with two peer supporters, IM and KE. Using the concepts of positioning to illustrate the speaker's role in storytelling and incorporating the notion of "voice", the study analyzed the process of identity construction and the reflection of societal norms within the narratives. As a result, IM and KE are found to skillfully incorporate a diverse and rich array of "voices" (including monologues and dialogues), actively constructing an intermediary identity as peer supporters that connects individuals with administrative bodies and people with mental illness, as well as people with and without mental illness. Moreover, the underlying currents in both speakers' narratives reveal the presence of a societal norm related to employment.

Previous research has already identified the ambiguity of the peer supporter's role. This paper employs a linguistic approach (discourse analysis) to scrutinize the narratives of peer supporters and attempts to articulate the manifestation of the ambiguous positioning they occupy. While this study is a case analysis, it aims to provide insights into the role of peer supporters as a relatively new social category.

